

控物次平形銭

結び縁

堂胡村野

庫文空青

一

「八、まあそこへ坐れ、今日は真面目な話があるんだ」

「へエ——」

八五郎のガラツ八は、銭形平次の前に、神妙らしく膝ひざこぞう小僧を揃えました。

「外ほかじゃねえが、——手前てまえもいつまでも独りじやあるめえ、いい加減にして世帯を持つ氣になつちやどうだ」

平次は二三服立て続けに吸った煙管きせるをポンと投ほうり出して、八五郎の方へ心持ち身体をねじ向けるのでした。

「へエ——」

「へエ——じゃないよ、相手の選^えり好みをしているうちに、月^{さかや}代の光沢^{きつや}がよくなってよ、せつかくのいい男が薄汚くなるじゃないか」

「それほどでもねえよ、親分」

八五郎はそう言いながら、ニヤリニヤリと長い顎^{あご}を撫^なでるので
す。

「馬鹿野郎、いい男の気でいやがる」

「驚いたね、どうも、叱^しられているんだか、女房の世話をされて
いるんだか、見当が付かねえ」

「両方だと思え、冗談じゃねえ、手前のお袋はそればかり心配し

て死んだじゃないか。八の野郎も気はいいが、あの様子じゃ先々が心細い、せめて氣立てのいい嫁でも貰つてやつて、安心してから死んだ配偶つれあいの側へ行きたい——とな、それに手前の叔母さんもそう言つていたよ——」

「親分、貰いますよ、たかが女房でしょう」

「たかが女房——」

「ヘッ、叔母さんなんかときた日にや、猫の子だの嫁だの、生き物を貰うことばかり考えてやがる」

八五郎は少し忌々いまいましく舌鼓などを打ちます。

「死んだ姉の子の手前に、身を堅めさせることばかり考えているんだ、悪く言つちや済むめえ」

「だがね、親分、女房を貰うのも悪くねえが、煮豆屋のお勘坊はいけませんよ」

「大層嫌いやがったな、お勘つ子が落胆がっかりするぜ」

平次は少しからい気味です。飛切り真剣な話にも、こんな遊びが入らないと、滑らかな進行をしない二人の間だったのです。

「そんな話なら、あつしは帰りますよ、親分」

「あわてるなよ、八、これから話が本筋に入るんだ、——叔母さんへえもそう言ったぜ、同じことなら八五郎の氣に入ったのがよからうと、な。よく解った話じゃないか。目を付けた娘がありや、今のうちにそう言っておく方がいいぜ、後で実は言い交したのがあるなんざ通用しねえ」

「そんな氣障きざなのがあるものか。親分の前だが、こっちだけで氣に入つたのなら、江戸中には五万とあるが——」

「大きく出やがつたな、せめて町内うちだけにしてくれ。江戸中の娘に當つていちや、盆前に埒うちがあかねえ」

「町内だつて、いい娘が三人や五人はありますよ。もつともあつしなんかに払下げてくれそうなのはたんとはねえが——」

「言つてみな、何事も縁だ」

「縁は異なるもの——と来やがる、ヘッ、ヘッ、まず黒田五左衛門くろだござえもん様の御嬢さん」

ガラツハは大きな指を無器用らしく折ります。

「馬鹿野郎、相手は八百石取の御旗本の総領娘だ。安岡つ引にく

れるかくれないか考えてみる」

「だから、あつしは嫌だつて言つたじやありませんか、こつちで欲しいのは、なかなか向うで下さらねえ」

「そんなのは下さらなさすぎるよ、もう少し手頃なのを申上げな」
「手頃なのと来たね、有馬屋のお糸などはどんなもんで——」

ガラツ八は少しやに下がります。

「呆れた野郎だ。有馬屋は町人に違えねえが、神田で二三番と言われる万両分限だ。手前なんか娘をくれるわけはねえ、もう少し手軽なのがあるだろう」

「だんだん糶り下げて、煮豆屋のお勘子なんか嫌ですぜ、親分」
「心配するな、お勘子までにはまだ間がある。——それから誰だ」

平次も少し面白そうです。

それを苦々しく聞いた様子で、

「お前さん、そんな事を——」

女房のお静が口を出します。

「黙っている、お前なんかの知ったことじゃねえ」

と平次。

「乾物屋のお柳^{りゅう}」

ガラツ八は続けます。

「うむ、これはいい」

「もう一人、棟^{とうりよう}梁^{りやう}のところのお留坊^{とめ}などはどんなもので——」

ガラツ八は言い切ってしまつて、他人^{ひとごと}事^{こと}のようにニヤニヤして

おります。

「町内の三人娘へ、門かどなみ並眼をつけるのは慾が深すぎるぜ、――

三人とも手前が言い交したわけじゃあるめえ」

「言い交しましたよ、親分」

「何だと？」

「独り言でね、へッ、へッ」

「この野郎」

どうも手の付けようがありません。

「だから放っておいて下さい、どうせこちらの思うようにはなりやしません」

投げたことを言う八五郎の言葉には、何がなし暗い諦めあきらめがあり

ました。

「ね、お前さん、八五郎さんの本当に好きなのは、三人のうちでも、乾物屋のお柳さんですよ」

お静は火鉢の鉄瓶にさわるような恰好をして、そつと平次の耳みみに囁くささやのでした。

「そうかい、——だが、あの娘には、縫箔屋ぬいはくやの丹次たんじが付いていてるてえじゃないか」

「え、それからもう一人、有馬屋の番頭——菊石あばたの又六またろくが——」
「娘一人に婿三人はうるさいな、こいつはあきらめた方が無事かも知れないぜ、八」

平次も妙に深入りした話を引戻し兼ねて、淡い悔いに似たよう

なものを感^じた様子です。

二

この話があつて間もなく、三人娘の運命に、恐ろしい呪いが降りかかりました。

それは、三月の節句が過ぎて三日目。

「た、大變ツ、親分」

八五郎が鬚まげ節つづしを先に立てて、礫つぶてのように飛込んで来たのです。

「何だ、八、請合^い三日に一度ずつは大變を喰^はわされるぜ、手前

と付き合っていると、つくづく寿命の毒だと思うよ」

房楊枝ふさようじを井桁いげたに挟んで、ガボガボと嗽うがいをやった平次、一向

物驚きをしない顔を、ガラツ八の方に振り向けました。

「親分、お柳が殺されましたぜ」

「……………」

「乾物屋のお柳が、妻恋つまこい稲荷いなりの境内でやられていますぜ」

「何だと」

「行ってみて下さい、大根畠きんたの金太の野郎が、一と足先に嗅ぎ付けて、さんざん搔き廻しているのを見て、あつしはここへ駆け付けただが——」

「騒ぐな、八」

そう言いながら、手早く顔を洗つて、着換えをした平次、顎あごを一つしやくつて、ガラツ八と一緒に現場へ飛びました。

ツイ二三日前うわさ噂をしていた乾物屋のお柳、——ガラツ八も満まんざ更らでなかったらしい、町内の評判娘の死は、平次の職業意識を、ほんの少しばかり湿っぽくします。事件を報告したガラツ八が、日頃はしやの躁ぎ切つた調子に似ず、妙に沈んでいたのは、日頃平次にたて楯をつくことばかり考えている若くて野心的な岡っ引、大根畠の金太に対する反感ばかりではなかった様子です。

妻恋坂上のささやかな稲荷、見通しの木連格子きつれごうしの前、大きな賽さ錢箱いせんばこの蔭に隠れるようになって、紅あけに染んだ娘が一人、浅ましくも痛ましい姿を、まざまざと三月の朝陽に照らし出されている

のでした。

「寄るな寄るな、見世物じゃねえ」

町役人と番太が声をか溷らして野次馬を追ひ散らしている中へ、平次と八五郎は飛込んだのです。

「お、銭形の」

「大根畠の兄あにき哥か」

神田と湯島に、自然睨み合つた形になっている御用聞が二人、娘の死骸を挟んで妙に改まります。

「見当は付いたのかい、大根畠の」

平次は死骸の上に眼を落しました。

「いや、何にも判らねえのさ」

金太は田螺たにしのように、心の殻を鎖とぎしました。

殺されたお柳は、有馬屋のお糸、棟梁吉五郎きちごろうの娘お留と並ん

で、明神様の氏子うじこの中に、三つ星オリオンのように光った娘だけに、碧血

に浸つてこと切れた姿は、言いようもなく凄艶せいえんを極めました。

傷は背後うしろから喉笛を右へ斬られたもので、髪も乱れず、衣紋えもんも

崩れず、蠟ろうのような顔が仏作りで、半面に血潮を浴びたにしても、

清らかにさえ見えるのです。

「刃物は？」

平次は心持あたりを見廻しました。

「これだよ」

金太はさすがに隠しもならず、懐中ふところから手拭に包んだままの

血染の小^{こがたな}刀を出して見せます。

「よく磨^とぎ込んであるね。柄^えに少し籐^{とう}を巻いて、——素人の使う品じゃねえ」

「この通り、焼印が捺^おしてあるよ」

金太は掌^ての中に小刀の柄を返して見せました。裏には丸に吉^{きち}の字の焼印がマザマザと捺してあるのです。

「そいつは？」

と平次。

「大工の吉五郎の道具だよ」

「えッ——、お留坊^{おやし}の親父^{おやじ}の？」

「その通りさ、こんなに早く犯人^{ほし}が挙がるとは思わなかった。下

つ引が二人飛んで行つたから、追つ付けしよつ引いて来るはずさ」
大根畠の金太はこの上もなく得意でした。錢形平次の鼻をあかした快感にひたつて、ニヤリニヤリと悦に入つております。

「そいつは変じやないか、大根畠の兄哥」

平次は顔を挙げました。

「何が変なんだ、錢形の」

「傷と刃物が合わないぜ、——お柳の頸筋を斬つたのは、薄刃のあいくち匕首だ。肉もはずずに、糸を引いたように見えるが、うんと深く切り込んでいる。そんな肉の厚い三角に尖つた小刀とがじやない」

「……………」

「下手人は誰だか解らないが、お柳を殺したのは、その吉の道具

でないことだけは確かだぜ」

平次は静かに言い切ります。

三

「八、見世物にされちや死んだお柳が可哀相だ。手前も満更知らない仲じやあるめえ、菰こもでもかけてやるがいい」

検屍けんしの済まないうちは、死骸を動かすわけにもいきません。平次はそう言つて、妙にしょんぼりしている八五郎を振返りました。

「へエ——」

ガラツ八は素直に立ち上がって、近所から菰を借りて来ると、

お柳の死骸の上にそつと掛けてやりました。いや、その菰をかけるさえも痛々しい心持でしょう。野次馬を叱り飛ばした自分が、ツイ吊い心で、半分ほど隠したお柳の美しい死骸に目礼したのです。

「おや、——変なものを握っていますぜ」

「何？」

あわてて死骸の手を押えたのは、平次ではなくて、功名に急いでいた金太でした。

「こいつは狐格子きつねごうしに結ゆわえる縁結びの紙じゃないか」

半紙を八つ切にして、半分ほど縫よったのを二本、頭の方で結び合せたのは、言うまでもなくその頃の女子供が遊び半分にやった

縁結びで、男女の縁に關係のある社の格子には、御神籤と一緒おみくじに、この縁結びの紙片かみきれが、うんとブラ下がっていたのです。

「どれどれ」

顔を出した平次とガラツ八。

「女の方は——お留と書いてある、おや、これを見てくれ、銭形の」

金太の指先にほぐれて行つた一方の紙片には、なんと、「八五郎」と書いてあるではありませんか。

「……………」

平次と八五郎は思わず顔を見合せました。

「八五郎もたくさんあるが、この辺じゃ——」

金太はそう言いながら、ニヤリニヤリとガラツ八の顔を覗くのです。

「お留——というのは、吉五郎の娘だろう」

平次にもこの謎は解りませんが、とにかくにも、殺されたお柳の手の中から出たのですから、何か深い仔細のあることは疑いもなかったのです。

その時、お柳の母親——乾物屋の女房のお倉くらは、額で歩くようにして飛んで来ました。

「……………」

平次も、金太も、ガラツ八も、この真つ蒼な顔と、気違い染みた眼と、わななく両手もろての前に、思わず道を開きました。

「お柳、——お前は、お前はまア——」

あとはもう言葉も成さぬ様子で、血だらけの娘の死骸に獅^し噛^がみ付いたまま、ヒイ、ヒイ動物のような悲鳴をあげながら、ワナワナとふるえているのです。

この恐ろしい母性の動乱の前に、物を訊ねる勇氣もなく、三人の岡っ引は、顔を見合せて立ち竦^{すく}みました。

「親分、野郎をしよつ引いて来ましたよ」

ザワザワと立ち騒ぐ群衆を掻きわけるように、二人の下っ引は、大工の吉五郎を連れて来ました。さすがに縄はかけませんが、両手を左右から押えて、貧乏揺るぎもさせまじき気色です。

「御苦労だな、——そんなに手荒にしなくたっていい」

刃物の違いを見せつけられた金太は、照れ隠しにこんな事を言つて、吉五郎をさし招きました。

吉五郎は四十前後の屈強な男で、大したよい腕ではありませんが、一刻者らしさが、^{いっこくもの}妙に人を煙たがらせます。

「あつしをどうしようというんで、え？ 親分」

少し反抗的になつてゐるらしい吉五郎。

「これを見ろ、吉」

その眼の前へ、歎きの母親を少し退かせました。^ど朝陽に照らされた無残な死骸は蔽^{おお}うところなく、大きく開いた吉五郎の眼に焼き付けられます。

「あッ」

吉五郎の驚きは予想外でした。今までの少し太々^{ふてぶて}しい態度は、一瞬にして消えると、五体の骨を抜かれたように、よろりと下つ引の四本の手の中へよろけ込んだのです。

真つ蒼な顔、——大きく見開いた眼、これは、自分の殺した死骸に直面した下手人の顔でないことは、どんな素人にも、たった一と目で判ります。

「吉、——これを知つてゐるだらうな」

平次は静かに水を向けました。

「乾——乾物屋のお柳ですよ」

吉五郎は漸く^{ようや}冷静を取戻して、乾いた唇を嘗^なめながら、これだけの事を言いました。

「誰が殺したか、見当ぐらいはつくだろう」

「……………」

吉五郎は黙って首を振りながら、金太の顔を見上げました。

「この小刀を知らないとは言うまいな」

金太はもう一度血染の小刀を出して、吉の焼印を上にも、吉五郎の鼻先に突き付けました。

「あつしのですよ。どうしてこんなところに？——」

吉五郎はゴクリと固唾かたずを吞みます。

「どこに置いてあつたんだ」

平次は静かな調子でこう答えを導きました。

「そいつは、有馬屋に置いてある道具箱の中にあつた小刀ですよ」

「それに間違いはないな」

「間違いなんかあるもんですか、職人は自分の道具を忘れるような事はありません」

「いい職人なら、人を殺しても、道具を捨てて行くような事はあ
るまいな」

静かに言う平次の顔を、吉五郎は凝^{じつ}と見詰めております。

「その通りですよ、親分」

「ところで、有馬屋ではどこの普請をしているんだ」

「あつちを直せ、こつちを直せと、二た月も前から入りつきり
で、いちいち道具箱を持って歩くのも面倒臭いから、預けっ放し
ですよ」

「何か有馬屋に気に入らない事でもあるのかい」

平次は早くも、吉五郎の語氣の間から、押え切れない憤懣ふんまんを
観て取ったのです。

「手間を払わずに半歳も一年もこき使われちゃ、笑ってばかりも
いられないでしょう」

「借りでもあつたのかい」

「まあ、そんな事で」

吉五郎はそれ以上のことを言いたくない様子です。

四

「近頃、娘の様子に変なことはなかったのかい、お神さん^{かみ}」

金太が吉五郎を番所へ引いて行つた後、平次はお倉の落着くのを待つて、こう訊ねる氣になりました。

「変つたことばかりでしたよ、親分さん」

お倉の答えは予想外です。

「そいつを詳しく話してくれ。お柳の仇^{かたきうち}討^うが、とんだ早く出来るかも知れない」

「どんな事から申上げましょう」

お倉は心の激動を押えて、一生懸命話の緒^{いとぐち}口を搜しております。

「お柳は昨夜の宵のうちに殺された様子だが、若い娘が、なんだ

ってこんなところへ来る氣になつたんだ」

平次の問は、疑いをそのまま投げ出したようなものでした。が、お倉は思いの外素直にそれを受けて、

「縁結びの紙を格子から取る氣で来たんでしよう」

「母親のお前が承知の上でか」

「いえ、湯島の叔母のところへと言って夕方から出かけました。

遅くなつても心配しないようにと、くれぐれも言つて行つたので、泊つたこととばかり思い込んでおりました。それが、こんな姿になつて——」

お倉はまた新しい涙にひたるのです。

「縁結びの紙をどうして格子から取りたかつたんだ。お柳の手の

中にあつたのは、お留と八五郎の名が書いてあつたぜ」

「娘は暗いところで、手搜りてきぐで解いたので、たぶん間違つたのでしよう。娘が解きたいのは、娘と又六と結んだのでした」

「又六——？ 有馬屋の番頭の又六かい」

「え、あの菊石あばたの又六と結び付けられて、妻恋様の格子に結ばれるのを、娘はどんなに嫌がつたことでしょう」

「そいつはどういうわけだい、詳しく話してくれ」

平次は思わず乗出しました。後ろからはガラッ八の八五郎、これも自分の名前まで引合いに出た不思議な事件の匂いに緊張しきっております。

検屍の役人が来るまで——乾物屋のお倉の話は続きました。痛

々しい菰こもを除のけて、自分の羽織を娘の死骸の上に掛けたお倉は、本当に涙片手に、この物語を進めたのです。

有馬屋のお糸と、乾物屋のお柳と、吉五郎の娘お留は、三人とも十九の厄やくで、身分の距へだてを他所よそに、長い間仲よく付き合っておりました。近頃の三人の心は、次第次第に離れて行くことを意識しながらも、妙な我慢と意地で、子供の時からうわべの仲を表面だけ続けていたといった方がよかったです。

三人の心を離れた原因の一つは、その境遇の大きな距たりもありましたが、それよりも大事なのは、神田一番と言われた美男、縫箔屋の二番息子丹次が、京で修業を積んで、半歳前不意に三人の前に姿を現したことでした。

三人の間に、大きな競争が捲き起りましたが、家族同士の親しさから、一番先に丹次に近づいたお柳は、一番先によい条件を握ったことは言うまでもありません。

続いてお留が登場し、最後にお糸が競争圏内に入って来ました。お糸の後ろにある、万両分限の威力と、お柳の輝くばかりの美しさ、お留の江戸っ子らしい気前は、しばらくの間三つ巴に争い続けましたが、貧しいお柳は次第に失い、富んだお糸が、次第に獲るところが多くなったのは言うまでもないことです。

「三月の三日、お雛様の晩は、うちの娘も有馬屋へ呼ばれ、お留さんと一緒に御馳走になったそうです。御飯の後で、奉公人の若い娘達も一緒になって、縁結びの遊びをしたのだそうです」

「……………」

お倉の話は次第に核心に近づいて行きます。野次馬の好奇心に燃ゆる眼を遠くに眺めながら、平次もガラッ八も、思わず息を呑みました。

「お糸さんとお留さんと、お柳と、娘が三人、それに縫箔屋の丹次と、菊石^{あばた}の又六と、もう一人入れて、男が三人」

「それはこの八五郎だろう」

平次の中^{よこやり}言に、ちよつとお倉は口を緘^{つぐ}みましたが、素知らぬ顔をしてまた続けます。

「女三人の名を書いた観世^{かんぜ}縫^{より}と男三人の名を書いた観世^{かんぜ}縫^{より}と合せて六本、お雛様の前の二つの三方^{さんぼう}に載せて、目隠しをした子

供に引かせ、男と女と二本ずつ三組に結び、観世縹の端^{はじ}っこを開いて読み上げました。

「……………」

「有馬屋のお糸さんは縫箔屋の丹次と、お留さんは八五郎親分と、私のところのお柳は、執^{しつこ}拗くつけ廻されて、嫌って嫌って嫌い抜いている菊石の又六と結び合せられたのだそうです」

「……………」

「娘は病気になるほど嫌がりました。その上、縁結びはお糸さんと女中達の細工で、勝手に組合せたものと分つたのです」

「……………」

平次は黙ってその先を促しました。お倉の話は、不思議に深刻

味を帯びて来たのです。

「それでいい加減気を腐らしているのに、昨日^{きのう}娘がちよつと有馬屋へ行つてみると、お糸さんが面白そうに、『縁結びのお蔭で丹次さんと一緒になることを、親達も承知をしたから、三組の縁結びは、そのまま、私が自分で持つて行つて、妻恋稻荷の格子に結^{ゆわ}えることにした』と言つたんだそうです」

「……………」

「丹次さんを横取りされた上、又六などと一緒にされてはたまらないと思ひ込んだのでしょう。娘は湯島の叔母へ行くからと言つて日暮れ前に出かけ、どこかで時を過して、暗くなつてからここへ、縁結びを取り捨てに来たのでしょうか、——可哀相にこんな姿

になつて——親分さん、娘の敵を討つて下さい、これでは娘も浮ばれません、お願い、親分」

お倉は平次の方に膝行り寄つて、その羽織の裾に犇とすがり付くのでした。

「よしよし、敵はきつと討つてやる。が、お神さんに心当りはないかえ、誰にも言うわけじゃない、そつと俺にだけ聞かしてくれ、お柳をひどく怨んでいたのは誰だい、——お柳が死んで得をするものは誰だい」

平次はこんな素人臭いことを、物柔かに訊くのです。

「娘を怨んでいるのは又六ですよ、——娘が死んで得をするのは——お留さんですよ、親分」

「お留が得をする、そいつは可怪おかしくないか、お神さん。お留じやなくて、お糸だろう」

「いえ、丹次は浮気者です。今は金持の娘のお糸にチャホヤしていても、いざとなると、お柳の次と言われた、綺麗で氣象の面白いお留のところへ行くに違いありません」

「そんな事があるだろうか、——俺にはどうも判らない」

平次にもこの消息ばかりは分りそうもなかったのです。

念のために、狐格子に結んである夥おびただしい紙かみきれ片を調べましたが、

新しいのは大部分御神籤おみくじを疊んだもので、たまたま縁結びがあつても、この事件に係りのありそうなのは一つもありません。

「昨夜ゆうべのうちに、誰か取ってしまったんだね、親分」

「そんな事だろうな」

お柳の死骸の手に握ったのだけを取残して、たぶん下手人が持つて行ったのでしよう。

五

「父^{とっ}さんは？」

不意に、素晴らしい最高音^{ソプラノ}が、叱りつけるような調子で平次の耳に響きました。顔を挙げると、少し高くなりかけた朝陽の中に立ったのは、吉五郎の娘お留の、物怖^{ものお}じしない活き活きした顔です。

「お留か、——氣の毒だが、お前の父親は番所に引かれて行つたよ」

平次の声には、岡つ引らしくない穏やかさがあります。

「何をしたというんです。父さんは、どんな悪いことをしたんです」

お留の声には娘らしい若さのうちに怒りが燃えます。

「お柳を害めた疑いがかかったのだよ」
あや

「まア、——そんな馬鹿なことがあるものですか」

大きな眼が少しうるんで、氣象者らしい唇が、ピリピリと顫ふるえます。おっとりしたお柳の美しさには比べられないにしても、箱入娘の少し高慢なお糸などは、及びもつかぬ魅力を持っているお

留でした。

「何が馬鹿なんだ、お留」

「だって、お柳さんを怨む筋なんかないじゃありませんか、——
有馬屋ならともかく」

「吉五郎が有馬屋を怨んでいるのか」

平次の問いは間髪を容れぬ呼吸を掴つかみました。

「え、町内で知らない者はありやしません。父さんに無理な請負をさせて、さんざん損をさせた上、家作かさくを取上げたり、店立たなだてを喰わせたり、その上三月も半歳も只で使つたり——」

お留はそう一気に言い続けてゴクリと固唾かたずを吞みました。いかに隠し事の出来ない性分でも、こんな事をツケツケ言うのは、父

親のために、あまりよいことでないと気が付いたのでしよう。

「それつきりか」

平次は追っかけて問いました。

「え」

お留は唇を噛みます。こしらおえ事の縁結びの事、金の力で丹次をさ
らって行った事、有馬屋父娘おやこに対する怨みは、まだまだうんとあ
るにしても、それはここで言う筋ではなかったのです。

「縁結びのことを、お前は親父へ話したのか」

「え、あんまり口惜くやしかったんですもの」

お留は我慢のならない忿怒ふんぬを噛みしめるように、糸切歯がキリ
りと鳴ります。

「番所につれて行かれたところで、縄を打たれたわけじゃねえ。一と通りお役人方のお調べが済んで、罪がないとわかれば許されて帰るだろう。あんまり心配しない方がいい」

平次もツイそう言ってみる気になりました。この江戸っ子氣質かたぎの娘が、激しい氣象の持主だったにしても、平次には好感のもてる種類の人間です。

「親分、金太兄哥あにきにそう言つて、何とかしてやりましょうか」
ガラッ八も口を出します。相手が若いと、とんだフェミニストになるガラッ八です。

「そうもなるまいよ、いずれお役人方が見えてからの事だ。その前にちよつと有馬屋へ行つてみようか」

「吉五郎の道具箱から小刀を持ち出した野郎は、有馬屋に居るかも知れませんよ」

「……………」

平次は黙って先に立ちました。死骸は町役人とお柳の母親に任せて。

「親分」

ガラツハはそつと平次の袖を引きます。振り返るとお留は死骸の側に寄って、お柳の母親に何か慰めの言葉をかけている様子です。

有馬屋へ行つてみると、店中の空気はなんとなく硬張こわばつて、奉公人達の顔も、恐ろしく取澄ましております。

主人の治兵衛じへえは五十を越したばかりですが、子煩悩こぼんのうと因業いんごうで有名な男で、平次と八五郎を虫ケラみたいに見下しておりましたが、人殺しの疑いが娘のお糸の方へ向いていることに気が付くと、急に態度が變つて、下へも置かぬ扱いになります。

「親分、そんな事があるものですか。娘たちは、いかにも縁結びか何かやっていたようですが、若い者のする他愛もない遊び事で、そのために人に怨みを受けるはずもなし、また、人様を怨む筋もありません」

「ところで、縫箔屋の丹次を、お前さんはどう思っていないさるんだ」

平次は治兵衛の饒舌^{じょうぜつ}を封じて、問題の中心点に触れて行きます。

「どうも思ってるわけじゃございません」

「お糸さんがどうしても、一緒になりたいと言え、婿養子にでもする心算^{つもり}だったと言うんだね」

「それはもう親分、世間の解らない父親と違って、母親も亡くなった事だし、大抵のことなら娘の望みを遂げさせてやりますよ」

片親の甘さを遠慮もなくさらけ出して、治兵衛は縫箔屋の道楽息子、万両分限の跡取りにする気でいる様子です。

「お糸さんに逢いたいが——」

「なにぶん若い娘のことで、親分に物を訊ねられたら、びつくりして何を言い出すか解りません。その辺のことはお手柔かにお願い申しますよ」

そう言いながらも、奥から娘のお糸を呼出させました。

黙って入って来て、黙ってお辞儀をするお糸の様子を、平次はしばらくは黙って見詰めました。箱入娘の十九はお柳やお留よりは若々しく、色白のお人形首ですが、何となく我^{わがまま}儘らしい態度があつて、物馴れた平次などにはガラッ八ほど高く買えません。

「昨夜縁結びを妻恋様の狐格子に結えたのは誰だい」

平次はいつもにない冷たい調子です。

「あの、お里とお冬でした」

「奉公人だね」

「え」

「時刻は？」

「戌刻前でした」

それが悪い事か——といった、誇らかな色が、静かにあげた娘の顔を^{きつ}厳いものにします。

「縁結びは細工をしたものだそうだね、お前と丹次と、お留と八五郎と、お柳と又六と組合せるように——」

「……………」

お糸の大きい島田がガツクリ下がりました。嘘をつくことには

馴れていない様子ですが、その代り問い詰められた口惜し涙が、ホロホロと膝に落ちます。

「そんな事は、親分さん」

助け船を出す治兵衛。

「昨夜はどこへも出ないだろうな」

「それはもう親分、娘は日の暮れた街を見たこともありません。私も早寝が自慢で」

そう言う治兵衛の言葉には、かなりの誇張がありそうです。

「大工の吉五郎は、大層有馬屋を怨んでいるようだが、ありやど
ういうわけだい」

平次はガラリと話題を変えました。

「心得違いですよ。請負仕事に損をしたからって、私を怨む筋はありません。その上貸した金を取立てて文句を言われちゃ、商あきん人は商売が出来ません。それから丹次が一度や二度自分の娘へ甘い言葉をかけたからって、私どもまで怨まれる道理はないじゃありませんか、ね、親分」

治兵衛は急に雄弁になります。利害問題になると、一步も仮かしや借くしない様子が、平次にもよく呑込めました。

「番頭の又六に逢いたいが——」

「店にいるはずですよ」

立って案内する治兵衛を押えるように、

「いや、その前に吉五郎の預けてある道具と、又六の部屋を見せ

て貰いましょうか」

「へエ——」

治兵衛を先に、平次と八五郎はそれに続けました。

納戸に預けておいた吉五郎の大工道具には、一つ一つ吉の焼印が捺^おしてあり、小刀は一挺ありませんが、出そうと思えば、誰でもここから取出せることは言うまでもありません。

「ここが又六の部屋で、——^{ほか}外の奉公人と一緒に寝泊りをしております」

隣の六畳の暗い部屋を、治兵衛は指しました。

唐紙^{からかみ}へ手をかけると、建付けの悪いに似ず、心持よく滑って

少し荒らした古畳の六畳が、^{おお}蔽うところなく一と目に見られるの

でした。

「荷物を見ても構わないだろうな」

「へエ——」

又六の荷物——古い葛籠つづらを押入から出させて、平次は蓋を払いました。

一番上は節用集が一冊、着物が五六枚、それを一枚一枚取出すと一番下に渋紙に包んであったのは、鞆さやも柄つかもない、ヒ首あいくちが一口ひとふり口。

「あッ。そいつだ、親分」

渋紙をほぐすと、中から出たのは、刃渡り八寸ほどの、薄刃なわざものがら凄い業物。窓の明りに透かすと薄霞うすがすみを刷はいたような脂

が焼刃の上を曇らせております。

平次は、そつと目配せをすると、ガラツ八は疾風しつふうのごとく飛びました。続いて店の方から、叱咤しったと組付の凄まじい響き。

「親分、この野郎、逃げ支度をしていましたよ」

八五郎は番頭の又六の首根つかつこを掴んで、ズルズルと引摺つて来ました。

七

「又六、みんな申上げて、お上の御慈悲を願え。お柳を殺したのは手前てまえだろう」

平次は又六を引据えて、少し嵩^{かさ}にかかります。

「違います、親分さん、あつしじやありません」

又六は醜^{しゅうかい}怪^{かい}な顔を挙げて、精一杯の抗弁を続けました。

「手前でなきや誰だ——お柳に弾かれた怨み、このヒ^{あいくち}首で殺して、吉五郎の小刀を死骸の側へ捨てて来たんだろう」

「違います、親分」

「鞘^{さや}と柄^{つか}をどこへやった、おおかた血が付いて捨てたんだろう」

「血の付いた鞘と柄を捨てたのは私ですが、お柳を殺したのは私じゃありません」

「そんな馬鹿なことがあるものか」

平次は又六のしぶとさに腹を立てて、日頃にもなくその襟^{えり}髪^{がみ}

に手を掛けました。

「親分、それじゃみんな申上げてしまいます、聞いて下さい」

又六は観念した様子で、縁側の陽の中に、檻ぼろきれ褌巾のように蹲うずくまりました。平次はその様子を見定めると、又六の舌の動きを滑なめらかにするために、治兵衛お糸親娘おやこを、眼で追いやったことは言うまでもありません。

又六の話は奇っ怪でした。が、その筋だけを拾うと――、

三年越し乾物屋のお柳に焦がれた又六は、どう誠まごころ心を傾け尽しても、弾かれ、辱はずかしめられ通しなのに気を腐らし、いつそお柳を殺して、自分も死のうと思ひ定めたのが昨夜でした。

その頃お柳は別の悩みにひしがれて、妻恋稲荷に行っていると

は知る由もありません。納戸へ入って、棚の上に置いた、自慢のヒ首を捜しましたが、どこへ行ったか見当らず、心せくまま、側にあつた吉五郎の道具の中から、手頃な小刀を取出し、明神様の裏を、妻恋稲荷の前へ行くと、チラリと境内に、若い女の影が見えたのです。

—— お留だな ——

眼のよい又六は、遠い灯ひの中に、咄嗟とっさに相手を見極めました、何か素振りが変だったので、われにもあらず稲荷様の境内に入ると、お留は早くも姿を隠して、稲荷の格子の前に、大輪の花のようくずおに崩折れているのは、今殺そうと思ひ込んで来た相手のお柳の断末魔の姿ではありませんか。

又六は仰天しました。が、介抱するまでもなく、お柳はこと切れて、最早どうすることも出来ず、フト気が付くと、足下に血の染んだまま投げられたのは、自分の秘蔵の匕首と、その鞘です。

誰が一体有馬屋の納戸から匕首を持出して、お柳を殺したか、そんな事を考える暇ありません。それを見ると又六は、ぞつと臆病風に誘われて、お柳を殺して死ぬ気だったことなどはけろりと忘れてしまい、自分の匕首を拾って、その代りに吉五郎の道具箱から持つて来た小刀を血潮の中に抛り出し、後をも見ずに逃げ帰ったということです。

「お留さんに訊けば解ります、刃物を替えたのは私ですが、お柳を殺したのは私じゃございません。親分、これは少しの飾りもな

い、正直真つ当のことでございます」

そう言う又六の言葉には、馬鹿馬鹿しさと正直さはありますが、嘘も駆引もあらうとは思われません。

「血染のヒ首なんか、何だつて隠しておいたんだ」

平次はもうそんな事より外に訊くこともなかったのです。

「御殿奉公した母親の形見で、これは捨てなくなかったのです。鞘と柄は、あんまり血に汚れたので神田川へ抛り込みましたが、中身だけは捨てる気になりませんでした」

又六の顔は、涙と汗に塗れて、まみ山椒魚さんしやうおのように醜く光ります。

「さア解らねえ、——下手人は誰でしょう、親分」

ガラツ八はキナ臭い鼻を向けました。

「お留でなきや——縁結びの仲間にされた八五郎だろうよ」

「冗談でしょう、親分」

八五郎は大面喰らいです。

八

「銭形の」

「おや、大根畠の兄哥あにきか、吉五郎はどうしたえ」

銭形平次は、明神様の裏で、ハタと金太に逢いました。その日の夕刻です。

「吉五郎は日暮れ前に家へ歸されるはずだよ、——証拠の小刀が傷口に合わないのは、お役人方も承知だ。あれじゃお奉行所へ送るわけにいかねえ」

「そうか、——そいつは大変だ、吉五郎が歸る前に、少し当っておきたいことがあるんだが——」

「目星でも付いたのかい」

「まあそんなところだ、金太兄哥も一緒に来て見るがいい」

平次の自信あり気な態度は、金太とガラツ八をすっかり征服しました。

行く先は大工の吉五郎の留守宅。

「御免よ」

「あッ、親分さん方」

入口に迎えたお留は、すっかり顛倒てんとうしております。

「吉五郎はまだ帰らないかい」

「え」

「少し邪魔をするよ。さア、金太兄哥も八も入るんだ」

平次は無遠慮に娘一人の家へ入ると、日頃のよいたしなみもかなぐり捨てて、四方をキョロキョロ眺めております。

「銭形の、——もう吉五郎が帰って来る時刻だぜ」

金太はその前にやる事があつた、といった顔です。

「何の役にも立たないだろうが、二人手わけをして、家中を捜してくれ、血の付いたものでもありや占めたものだ、俺はちよつと

外に行つて来る」

平次は言い捨てて、プイと外に出ました。その後で、金太と八五郎が、お留の憤々たる忿怒の前に、どんなに深刻な家捜しをしたことか。

やや四半刻しはんとき（三十分）ばかり、四方あたりが雀色になった頃に、平次は勝ち誇つた様子で歸つて来ました。

「何にもないぞ、錢形の」

それを極きまり悪く迎える金太。

「もういい、それでたくさんさ、証拠は揃つたよ」

平次は日頃のない有頂天です。

「何が揃つたんで、親分」

ガラツハは行^{あんどん}灯を点けて来ました。

「お留、白状してしまえ、お慈悲を願つてやるぞ」

平次はズイと寄ると、娘の肩を押えました。

「あれッ、何をするのさ、白状することなんかありやしない」

お留は氣象者らしく反抗を続けながらも、ヘタヘタと敷居際に崩折れます。

「お柳の殺された時、側に居たのはお前だ——又六が見たから間違いはない」

「でも」

「格子から縁結びを二つ引き千切つて、うつかり捨てるのを忘れて持つて来たはずだ。人一人殺した後だから無理もないが、その

始末をしなかったのは落度さ。これを見るがいい、お勝手の土^{へつつ}
竈の中に、半分が燃え残っていたぞ。読んでやろうか——お糸、
丹次、——お柳、又六——」

平次の手には燃え残った紙^{かみきれ}片が二つ、ヒラヒラとお留の眼の
前に動きます。

「あれ、止^よしておくれ、そんなもの」

お留は汚らしいものを見るように、顔を反^{そむ}けました。

「まだある。お柳を殺した^{あいくち}ヒ首を、有馬屋から持出せるのはお
雛様の御馳走に呼ばれたお前とお柳の外にはない。殺されたのが
お柳だから、ヒ首を持出して殺したのはお前さ」

「……………」

お留はもう物も言いませんでした。

「俺は今それを思い出したから、有馬屋へ飛んで行つて、出入りの者と、納戸の間取りを見て来たよ、——お留、言い訳はあるまい、神妙にお縄を頂戴せい」

平次は一步近づきました。懐中ふところをまさぐると、銀磨きの十手が、その右手にキラリと光ります。

敷居に坐つて、深々とうな垂れたお留の姿は、見るもあわれな萎しおれようでした。勝気で美しいお留の、こんなに打ちひしがれた姿を、ガラツ八は想像もしたことはありません。

「親分」

ツイ娘を庇かばつてやりたいガラツ八。

「手前の知ったことじゃねえ、黙っている」

叱りとばした平次の左手には、捕縄がバラリと捌さばかれます。

行灯あんどんの薄明りに照らされて、お留の姿は神々こうこうしくも美しい

ものでした。

が、その時――、

「親分、私を縛って下さい、娘に罪はない、――お柳を殺したのは、この私だ」

飛込んだのは親父の吉五郎、お留と平次の間に割って入ると、
両手もろてを後ろに廻して、観念の顔をあげるのです。

「あれ、父さんとっ」

驚くお留。

「いや、止めるな、お留、——縁結びの話を聞いて、俺はカツと
 なって飛出した。——それはお前も知つての通りだ。あの晩、お
 糸の阿魔あまが稲荷ちげ様に来るに違えねえと思つて、有馬屋の納戸から、
 ヒ首まで持出して用意したんだ。——有馬屋には重なる怨み、親
 父の治兵衛を一と思いに殺したんじや腹が癒いえねえ。眼へ入れて
 も痛くねえようなお糸を殺して、うんと思ひ知らせる心算つもりだつた
 んだ」

「……………」

吉五郎の言葉の予想外さ。お留も、平次も、金太もガラツ八も
 ただ聴入るばかりです。

「狐格子で何か細工をしている若い娘、夜目にはお糸と思ひ込ん

だのも無理はあるめえ。後ろから一と思いに斬って、格子から新しい縁結びを引き千切って帰ったのはこの俺だ、——翌^{あく}る朝、現場へつれて行かれて、死骸を見た時の驚きを察してくれ、お糸と思ひ込んで殺したのは、可哀相に乾物屋のお柳だ」

「……………」

「思ひ切って名乗って出ようと思ったが、後に残るお前が可哀相で、逃れるだけは逃れてみようと思ったのは俺の未練だ——お留、勘弁してくれ」

「お父さん」

「お前が縛られそうになつちや、黙っていらねえ、——親分さん、この通りだ。私を縛っておくんなさい。有馬屋が安穩に暮す

のは業腹ごうはらだが、それも今更どうにもなるめえ。俺が余計な事をしなくたつて、天道てんとう様は見通しだ、——人間の手でどうしようと思つたのが間違まちがえだろう」

「お父さん、お前は、お前はまア」

這はい寄るお留と互に手を取合つて、親娘二人の、身も浮くばかりの悲歎を、平次はしばらく黙つて見ていましたが、

「金太兄哥の手柄にしてくれ」

一步身を退ひいて、親娘の悲歎に顔を反けます。

「そいつは、銭形の——」

と尻しりごみする金太。

「いや、最初吉五郎に目をつけたのは金太兄哥だ。なまじつか、

俺が余計な事を言ったから、お役人方も吉五郎を許す気になったんだ、手柄はやはり金太兄哥のだよ」

平次はガラツ八を眼で誘って、滑るように外に出ました。

*

「親分、本当に吉五郎が下手人ですかい」

ガラツ八は後ろから声をかけました。絵解きが聞きたい様子です。

「本当とも、俺は吉五郎が外で聞いていると知ったから、わざとお留を疑うように見せたのさ。吉五郎に白状させたかったんだ。」

自首するといくらか罪が軽くなる」

平次の言葉は淋しそうです。

「一番嫌なのは、丹次の野郎じゃありませんか」とガラツ八。

「その通りだよ。娘三人の心持を滅茶滅茶にするより、いつまでも独り者の八五郎の方が立派さ」

「その気で付き合つて下さい、親分」

「ハツハツ、これで、八の嫁話も当分沙汰止みか」

「有馬屋の親娘は憎いじゃありませんか」

八五郎はまだ憤々ぶんぶんしております。

「腹を立てるなよ、吉五郎も言ったじゃないか、天道様は見通し

さ」

「気の長い天道様じゃありませんか」

「まあいい、——それよりも可哀相なのはお留だ。あの晩、腹を立てて飛出した親父を心配して、稲荷様の境内へ行つて又六と顔を合せたんだ」

「……………」

平次の声は濡ぬれました。

「人殺しの娘じゃ世話の仕手してもあるめえ。可哀相にあの氣象じゃ苦勞をするだろう」

「親分——」

「岡っ引はいやだなあ、八、せめてお留の行末でも見てやりたい

が」

三月の風は、生なまぬる温く二人の汗ばんだ顔を撫でます。八五郎はブルンと身を顫ふるわせました。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（八）お珊文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年12月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第七卷」中央公論社

1939（昭和14）年5月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年3月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2017年9月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

縁結び

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 野村胡堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>